

## フッサールにおける述定意味<sup>(1)</sup>

——前期ハイデガー哲学との比較考察——

星 揚一郎

### 一、はじめに

「精神は志向的内容によって諸々の対象と関係しているにちがいない。したがって、真理とは命題的内容と精神に依存しない対象との一致であるはずである」。ドレイファスは「知性ともとの一致」をモデルとする伝統的真理観の最たるものとして、こうした「フッサールのような」主張を例として挙げている<sup>(2)</sup>。引用文中の「志向的内容」ないし「命題的内容」はフッサールにおいては総じて「意味」と置換されうるだろう。ゆえに、ドレイファスは「意味」と「対象」との一致こそフッサールにとっての「真理」であると解釈しているのである。しかしながら、原的な直観からのみ得

られる「明証」を真理の唯一の源泉とする、周知の「真理」理解からすると、「命題的内容」と「対象」との一致というドレイファスのフッサール解釈は異様にも思われる。果たして、ドレイファスのフッサール解釈は認められうるであろうか。

他方、ハイデガーは、批判の対象としてフッサールの名を直接だしてはいないものの、『存在と時間』において伝統的真理観を次のように繰り返して呈示している。例えば、「真理は $\wedge$ 本来的には $\vee$ 判断に帰属するものである」(SZ,33)。「言表は、第一次的で本来的な真理の $\wedge$ 在りか $\vee$ (Ort)だと古来みなざれている」(SZ,154)。あるいは、「一、真理の $\wedge$ 在りか $\vee$ は言表(判断)である。二、真理の本

質は判断とその対象との $\wedge$ 一致 $\vee$ のうち潜んでいる。三、アリストテレスが…… $\wedge$ 一致 $\vee$ としての真理の定義を広めた」(SZ,214)。さらに「根源的真理は第一次的には $\wedge$ 判断 $\vee$ の性質である……」(Vgl.SZ,297)といった具合に『存在と時間』全編にわたって「言表」(＝判断)と「対象」との一致を伝統的な真理観としてあげている。

ハイデガーは『存在と時間』においてこのような伝統的な真理観を拒否しているのだが、いかに拒否しているのだろうか。また、そのうえで定立されるハイデガーの真理観はいかなるものであり、その正当性はどこにあるのだろうか。本稿では、まず第一にハイデガーの言表(Aussage)概念を確定し、それを踏まえて、ハイデガーの伝統的真理観批判を明らかに示す。その際、適宜、ハイデガーに暗に批判されているフッサールの側からの反論や同様の問題に対するフッサールの解答の提示を試みてみたい。最後に、ハイデガーの真理論の特徴を総体的に浮き彫りにするとともに、そのフッサールの「述定意味」との関連について述べてみようと思う<sup>(2)</sup>。

## 二、言表

ハイデガーは、言表に独自に三つの意義を、つまり「提示」(Aufzeigung)、「述定」(Prädikation)、「伝達」(Mitteilung)を充てて考察している。順次、概観してみることしよう。

### 二・一、提示

第一の「提示」でもってハイデガーが言表を特徴付けている内容は、「存在者を存在者のほうから看取させる」という「アポファンシスとしてのロゴスの根源的な意味」である(SZ,154)。このことはすでにハイデガーによって『存在と時間』の序論で触れられていた。つまり、アリストテレスの『命題論』での説明を引用して「ロゴスの根源的意味」を「ロゴスは…語りつつあるものにとって、ないしは相互に語り合っている人々にとって…それについて語られている当のものをそれ自身のほうから(アポ)見させる(ファイネスタイ)のである」とハイデガーは定義している(SZ,32)。

ただし、こうした「見る」という言い回し、ハイデガーの術語で言えば「視」(Sicht)は、(I)肉眼で知覚することや、(II)事物的存在者

(Vorhandensein)を純粹に非感性的に認知することを決して意味しているのではないということに注意せねばならない(vgl.SZ,147)。(I)に関しては、心理主義的な認識と対比することで、ハイデガーは「視」構造を際立たせている。ここで言表の意義のうちの一つである「提示」が指しているものは、言表するひとの心理的な状態(この存在者についての表象作用)でも、単に表象されたものでもないとのちにハイデガーは言う(vgl.SZ,154)。

次に、(II)をあげることで(ハイデガーによって直接そのように指摘されているわけではないが)フッサールの本質直観とハイデガーの「視」との差異化をわれわれに促しているように思われる。フッサールによれば、われわれはスペチエシ的なもの(ある種の理念)を看取することができるし、絶えずそのようにしている。「提示」が、そうした本質のごとき「非感性的なもの」を感知することを指しているのではないとハイデガーはいうのだ。それに関連して、ハイデガーは「純粹自我」や「意識一般」といった理念は現存在の現事実性と存在機構との存在論的性格を飛び超えてい

るとして、暗にフッサールを非難している(SZ,229)<sup>(4)</sup>。

そうするならば、ハイデガーの「視」構造とはいかなるものか。例えば、ハイデガー自身が挙げている「このハンマーは重すぎる」という言表において、「視」ごとして発見されているもの(das Entdeckte)は「道具的存在性(Zuhandenheit)という仕方での存在者」、つまり「道具が己れ自身のほうから己れをそのうちで顕わにする存在様式」における「存在者」にほかならない(vgl.SZ,69,154)。ハイデガーの意を汲むならば、このハンマーという道具がそれだけで存在していることはありえないのであって、ハンマーという道具には、そのハンマーが打つ釘、その釘を打ちつける板、その板を計測する定規や板を適当な長さで切る鋸などといったもろもろの道具全体が含まれている。つまり「個々の道具に先立ってそのつどもろもろの道具の全体性が発見されているのである」(SZ,68f.)。したがって、言表をする際、提示される存在者(道具的存在者)が言表をする人の近くにあるかどうか、あるいは彼がそれを見ることができるかどうかは問題にならない

(Vgl. SZ, 154)。よしあたり、認識作用に先立つ道具  
連関の根源性をハイデガーは語っているのである。

## 二・二、述定

第二に、言表は「述定」という意義で用いられる。つまり、ハイデガーによれば、第一の「提示」においては命題全体が言表といわれていたが、ここでは「このハンマーは重すぎる」という命題の「重すぎる」がまさに主語についての「述定」ないし「限定」であると言われ、すなわち「言表」と言われる。もちろん、「述定」は「このハンマー」を主語として定立することに対応している。

一方、フッサールにとっては、述語（意味）を介して主語（対象）に関わることが重要であり、言い換えれば主語となる対象そのものはそれ自体ではわれわれにとって把握不可能なものである。「判断の基体となる対象」(Gegenstand-würber)に意味を介してかかわり、意味を賦与することによってそれを構成するとフッサールは考える。フッサールは、こうした考え方をもとに、純粹自我による超越論的な対象性の構成という方途へと進むことになる。つまり、フッサールにおいては「端

的な対象」(Gegenstand schlechthin)、「志向された対象」はわれわれにとっては無きに等しいものであって、「志向された対象そのもの」(der intendierte Gegenstand als solcher)、「つまり」「しかし」という仕方で志向された対象そのもの」として把握されているのであった。「端的な対象」なるものは表象作用を分析してはじめて記述されるものなのである<sup>5)</sup>。

翻って、ハイデガーにおいては、主語について何らかの述語づけすること、すなわち規定をすることによって初めてその主語となるものが発見されるのではない。そうではなく、むしろそのような規定を「撤去することによって」こそ、言表されるもの（ここではハンマー）がよりあらわになるのである。すなわち、「言表の第二の意義（述定）は己れの基礎を第一の意義（提示）のうちにもっているのである」（以上、vgl. SZ, 154f.）。この点は表面的にはフッサールと大きく異なる点である。

## 二・三、伝達

最後に、第三として言表は「伝達」という意義で用いられる。「伝達としての言表は、規定する

「述定する」という仕方では提示されたもの「存在者」を共に見させる…(つまり)他者とともに分かちつつ伝達する」と、前二者と関連付けてハイデガーは「伝達」を規定する(SZ, 155) (括弧は引用者による補足)。他者を考慮に入れるかぎり、ここで「伝達」に込められている「発話されている」という性質(Ausgesprochenheit)を言表に帰するのは必然的であるだろう(ibid.)。

対して、注目すべきことに、「フッサールは『論理学研究』などで「ひとりごと」を表現(Ausdruck)の最も純粋な形態としている(vgl. Hua19, 41, Hua26, 10)。こうした見解は言語表現の物理的側面を極力排し、表現の意味のイデア性を保持しようとした結果であろう。このことは他者の問題を考察するうえで、あるいは言語そのものを考察するうえで、一見不都合であるかのように感じられる。しかしながら、存在へと進むハイデガーと進む方向こそ異なるものの、フッサールもまた言語表現を可能にしているより根源的なもの(意識一般)へと進んでいくことに変わりはない。しかも、『論理学研究』<sup>⑥</sup>のフッサールと前期ハイデガーとでは最終的な到達点は、「意

味」と「わたし」との根源的な関係という点で一致しているようにわれわれには思われる。

以上の三つの意義からハイデガーは「言表」を「伝達しつつ規定する提示である」と定義するにいたる(SZ, 156)。ただし、「提示」を説明する際に触れたように、ハイデガーの「言表」は決して原初的(primitiv)なものではなく、それに先立つ何かがあってこそ成立するものである。以下、「言表」に先立つ「視」およびさらに根源的なものへと考察をすすめていこう。

### 三、意味

ハイデガーによれば、言表の分析において「視」に見えられているものは「意味」ではなく、「道具的存在者」であった(SZ, 154)。それに対して、フッサールは意味を賦与することによって対象にかかわり、把握するとし、それ故にフッサールにとって「意味」概念は重要な意義をもっていた。ハイデガーにとつて「意味がある」とはいかなることなのであろうか。

ハイデガーにおいては、現存在がそのつと出

そ「了解作用」にほかならない。

#### 四、真理

ハイデガーは「言表（判断）は了解作用（Verstehen）に基づいており、かつその言表が解釈（Auslegung）のひとつの派生的な遂行形式である限りにおいて、それはまた意味（Sinn）をもつ」という（SZ, 153f.）。あるいは「言表とその構造であるトシテ（Als）とは、解釈とその構造である解釈学的なトシテとに、さらには了解作用、つまり現存在の開示性に基づけられている」ともいう（SZ, 223）。そうであるとすれば、まず、現存在の開示性（Erschlossenheit）とは何か。人間とは「 $\wedge$ その現である $\vee$ （sein Da zu sein）」という仕方で存在している…」存在者だとハイデガーは特徴付ける（SZ, 133）。このことこそ人間をほかの諸々の存在者から区別する指標である。例えば、人間以外の存在者とは、わたしが今扱っているワープロ、そのワープロが載っている机、あるいは机が置かれているこの部屋などである。対して、現存在にかんして、その「現（Da）の開示性とは明るくされていよう（Gelichtetheit）である」

会っている「道具的存在者」はすでに「有意味なもの」である。二・一で提示について考察した際、個々の道具的存在者に対して、もろもろの道具的存在者の全体がわれわれに与えられていると述べた。この全体の中で相互に道具的存在者は指示し合っているのである。ハンマーは釘を打つためのものとして、釘を指示し、釘は逆にハンマーに打たれるものとして指示されているのである。こうした全体性のうちに、どのような場面でも有用であるかといった「適所性」（Verwieseneigenschaft）なる存在性格が道具的存在者に備わっているのである（SZ, 83f.）。*やらに*は全体を含めて「適所全体性」が個々の道具よりも一層以前に存在しているとも繰り返して言われている（ibid.）。ハイデガーは先の指示作用のもつ「関連づける」という性格を「意味—付けする作用」（be-deuten）と*とらえ*、「意味—付けする作用」の全体を「有意味性」（Bedeutbarkeit）と*とらえ*（SZ, 87）。この「有意味性」は、意味を開示するための存在論的条件を自らのうちに含んでおり、同時に語や言語の可能的存在を基礎付けている（ibid.）。こうした「諸々の連関を、ある先行的開示性のうちで保持するもの」こ

(vgl. SZ, 133, 147)。

ハイデガーは、人間存在（現存在）を「慮」（Sorge）とし、次のものをその契機として挙げる。つまり、A「すでに中にある」（＝過去・*schon-sein-in*）、B「世界内存在者の（傍らにある）」（＝現在・*sein-bei*）、C「已れに先んじてある」（＝未来・*sich-vorweg-sein*）の三契機である。われわれはつねにすでに世界のなかへ投げ込まれており（＝被投・*Geworfenheit*）、それゆえにある気分に支配されている（*Gestimmtsein*）（A）。換言すると、こうした「情状性」（*Befindlichkeit*）は、そのつど何らかの気分のほうへ投げ込まれていて自由にならないという現存在の側面を表している。対して、われわれは自らを未来へ向けて企て投げる（*Entwurf*）ことによつて、つねに可能性に対して開かれている（B）。この契機が先に述べた「了解」である。現在、われわれ人間は、過去を背負い、未来へ向かうという、こうした二つの契機をともなつて、被投的企投という状態で「ある」のだ（C）。

このようなハイデガーによる現存在の根本構造にかんして、さらに「開示性は、情状性、了解、語りによつて構成されている」といわれる（SZ, 220）。

つまり、言表や「視」に先立って、われわれはすでに周囲の道具的存在者を「あらかじめ何かトシテ」把握しているのであって、「了解」はその諸々の可能性を企て投げるのである。「言表が行なう提示は了解においてすでに開示されているもの、配視的に発見されているものに基ついて遂行される」（SZ, 156）。そして「解釈とは了解において企投された諸可能性を仕上げることである」（SZ, 148）<sup>③</sup>。

このように「慮」の構造によつてわれわれは真理に関わっている。それと同時に、われわれは等根源的に非真理にも出会つており、その非真理の覆いの彼岸の真理と関わっている。ハイデガーにとつて真理とは、覆われていないこと、アーレティア（*aletheia*）にほかならない。それゆえにハイデガーは作用と対象との一致といった真理観は誤りであるとするのである。

## 五、フッサールとハイデガーとの比較

以上のごとく、ハイデガーの真理観を概観しつつ、適宜フッサールの見解を加えてきた。ここで、両者のさまざまな相違が際立たされたが、果たして冒頭で述べたドレイファスの見解は妥当してい

たであろうか。「志向的内容」(意味)と「精神に非依存的な対象」との一致がフッサールの真理である。ドレイファスはしていた。しかし、フッサールの公刊された著作にはこのような見解は見られない。フッサールにとって真理とはあくまでも「見る」に代表される意識作用に基づかれた「明証性」(Evidenz)である。ただし、直観に基づく明証性といえども外的知覚において必ず一面的な射映を通して現前する対象は、意味志向に対する意味充実の度合いが完全になることは原理的に不可能である。してみれば、フッサールの最も強調する見解は別のところにあるはずである。「意味」と「わたし」との根源的關係、われわれにとつて或るもの・Xがいかにして在るのか、およびそれについてわれわれはいかにして知識を拡大させていくことができるのかということ、このことがフッサールの関心である。

われわれはあるグループの「述定意味」ないしは「意味述定」(Bedeutungsprädikate)によってすでに性格づけられた環境(Umwelt)のなかで常に生活している<sup>(8)</sup>。そのなかでわれわれは、存在者そのものへと通じる「存在の意味」をわれわれ

に最も近いものとして構成しているのである。こうした「還元」以前のフッサールの論述に注目したい。主観が意味によって開かれているということは以下に述べるハイデガーの見解とある意味で合致するものではないだろうか。

ハイデガーは *Bewusst-sein* から *Da-sein* へ、つまり意識論から存在論へと移行した。そうした存在論において、われわれ現存在も道具的存在者も、おのれの存在を問うことができるかどうかといった存在論的・実存論的資格は別にして、いずれにしても、世界の中に投げ込まれた存在者に変わりはない。主・客の対立を超えたといつてもやはり世界のなかにその残余が見られる。ハイデガーの「視」なる術語は、どうしてもわれわれに伝統的な真理観を想起させるのだ。主・客の対立の止揚ということよりも前期ハイデガーにとって重要なことは「有意味性全体が、われわれ現存在を構成するへ了解Vなる契機と根源的に関係している」という点である。すなわち、たしかにハイデガーは言表は意味と関係するのではないとしていたけれども、その根底にある現存在の「慮」とそれに対して開示される「意味」との不可分な関係が呈示

されたことが『存在と時間』のポイントのひとつであろう。「存在者の自己実現の場がまず開かれており、その自己実現の場へと関わるどころにももの認識が成り立つ…」、認識以前に「存在者への関わりを初めて可能にする領域 (Bezugsbereich)」として受け取られ、引き受けなければならぬ存在者の自己実現の場√こそ、ハイデガーにとって自己隠蔽性√ (Unverborgenheit) としての自己真理√ (aletheia) に他ならぬこと<sup>9)</sup>。ハイデガーの「場」とフッサールの「意味」が生成する、その根源的な「場」とはいかなる相違があるのであろうか。

『意味論講義』のフッサールと前期ハイデガーには、これまでみたようにある種の近似した側面が見られた。換言すれば、フッサールのこうした側面にハイデガーが影響を受けたということができ得るであろう。

## 六、補足

周知の如く、一九四六年の『ヒューマニズムについて (を超えて)』<sup>(10)</sup>においてハイデガーは「転向」(Kehre)への第一歩を踏みだした。「言葉は存在の家である」(Die Sprache ist das Haus des

Sens)が後期ハイデガーの中心となる思想であるといわれる(WM, 311)。先に見たように、前期ハイデガーにおいて「言表」は、了解作用に基づけられた高次のものであった。しかしながら、転向後の後期ハイデガーにおいては「言葉」こそ「存在」に最も近いものとなるのである。後期ハイデガーとフッサールの連関について、あるいはフッサールの『意味論講義』の独自の意義については次の課題としたい。

## 凡例

フッサール著作集(Husserliana)からの引用の際には、Huaのあとの数字によって巻数を、ピリオドのあとの数字により頁数を表す。ハイデガー『存在と時間』からの引用は、略号SNとそのあとの数字で頁数を示す。翻訳があるものについてはそれぞれ参考にさせていただいた。

## 註

(1) 拙論は、一九九六年七月一日、第二四回若手ゼミ(於・山中湖)において口頭発表したテーマを別の角度から眺めたものである。難

決な発表を聞いてくださった方、とくに有意義な質問をしてくださった方にこの場をかりて御礼申しあげたい。

- (2) Hubert L. Dreyfus, *Being-in-the-World, A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*, The MIT Press, 1991, S. 266.
- (3) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1926 (Max Niemeyer Verlag, 16. Aufl., 1986).
- (4) ただし「現象学的還元」という思想が出てくる以前のフッサールにはこの批判はあたらな。そうした場合には、逆にフッサールは「イデア的なもの」「すなわち意味と「レアルな」心的作用との関係に腐心することになるのである。
- (5) Vgl. Edmund Husserl, *Vorlesungen ueber Bedeutungslehre*, Sommersemester 1908, bes. Sec. 8 (Hus26). 本文中に繰り返し返したように、一般的な理解では感性における事象そのものと意識との関係がフッサールにとつては真理の源泉である。しかしながら、フッサールの生前には公刊されなかったこの『意味論講義』においては、カテゴリー的に構成され

た意味概念（存在的意思⇨志向されたもの）のもの、例えば志向された単なるポストではなく、赤いものとして語られているポストそのもの）がわれわれにとつて、より近しいものとして挙げられる。つまり、ここから、実は、はだかの「点」的なポストがまずあって、それにたいしてわれわれが意味賦与するといった構造をフッサールは取っているのではなく、逆に構成され、述語付けられた命題のほうを「真理」として、より原初的なものとして考えていたのではないだろうか。フッサールにとつてカテゴリーは意識の構造ではなく、存在者、つまり意識外の事物の構造であり、ここに意識と意識に依存しないものとの根源的なつながりが見られるはずである。この点に関しては、わたしは一九九六年五月の日本哲学会において「フッサールにおける存在的意思」と題した研究発表で論じた。

- (6) Edmund Husserl, *Logische Untersuchungen*, 1900/01 (Hus18, 19/1, 19/2)
- (7) 了解については『存在と時間』第三一節以降を参照のこと

- (8) Edmund Husserl, Aufsätze und Vorträge  
1911-1921(Hua25),SS.325ff.
- (9) 赤松宏「ハイデガーの眞理論」(『名古屋大学  
教養部紀要 第三五号』、一九九一年)七頁。
- (10) Martin Heidegger, Brief über den  
Humanismus, in: *Wegmarken*, Vittorio  
Klostermann, 2Aufl., 1978.

(ほし よういちろう 名古屋大学)